
俺の日常って何だ！？

日平 雅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常って何だ!?

【Nコード】

N7174I

【作者名】

日平 雅人

【あらすじ】

短期集中連載!! 日常ってのは、人それぞれ違う。この物語は、一人の高校生の日常を書いたほのぼののスポーツ&学園コメディーストーリー!

第1話：コーラって結構砂糖入ってるんだよ？（前書き）

この小説を書いていると思った事がひとつ。

俺、なにが書きたいんだろうか・・・

スポーツ物なのか、学園物なのか、はたまた恋愛物なのかは、皆さんが勝手に判断しちゃって下さい。

第1話：コーラって結構砂糖入ってるんだよ？

25メートルのプール

天の上にある太陽の光がプールの水をキラキラと輝かせている。

水は透き通り、プールの底が見えるくらいだ。

ザプーンっ！！

雲一つない青空の下、優しいそよ風がプールの水に波を作る。
今の気温は29度。カラッとした暑さだ。

トンボが空を飛んでいる。

本日は晴天なり！！

「はい、今日の授業はここまで。週番、号令」

「起立、礼」

号令が終わり、今まで授業をしていた現国の教師が教室をでていく。

(やーっと6限目が終わった・・・)

教室の窓側、一番後ろの席に座っている一人の男子生徒はグイッと伸びをした。

「あ、正成、今日の部活3時50分からね」

突然、隣の席の女子が話し掛けてきた。

「了解・・・」

正成と呼ばれた男子生徒は、そのまま机に俯せになった。

ここは〇〇県立征咲高等学校。

その二年二組の教室に彼はいた。

成績はちょい悪、けど運動なら少しはイケる、少し短めの髪にキリツとした目、程よくついた筋肉、高めの身長。

彼の名前は谷笠正成、9月15日生まれの乙女座。

好きな食べ物は牛タン、好きな動物はペンギン、得意な教科は体育、

そして、現在所属している部活は・・・

「おーし、着替えた奴からストレッチな!!!」

そう言うのは、水泳部の顧問でもある教師、鍋木彰吾。

水泳部員達は次々にストレッチを始めている。

「おい谷笠、もっとしつかりストレッチしろ！」

「あーい」

正成は水着に着替え、プールサイドでグダグダなストレッチを始めた。

「「「あらあ！！へらへらするな！！！」」

注意されても全く動じない正成。

「お前はそんなに注意されたいのか!？」

「・・・つたく、だりいな」

ボソツと呟いた正成の声は、しつかり顧問の耳に入っていた。

「だるいとは何だ！」

「あ・・・聞こえてたのか・・・」

「おい谷笠、ちょっとこっちにこい!!！」

「・・・面倒臭い事になったな」

正成が渋々ストレッチを中断し、顧問がいる向かい側のプールサ

イドに行こうとしたその時、

「どりゃああああ！」

突然、何者かが正成に向かい全力疾走、正成が気づく前に、かなりの威力（助走大）を持つ跳び膝蹴りを正成に放った。

「どはっ！！！」

どっぽーん！！！！

突然の奇襲に正成は跳び膝蹴りをもろに喰らい、少し吹っ飛び、プールに落下した。

「あんた、ストレッチくらいちゃんとしなさい！！！」

さっきまで正成がいた場所に立ち、仁王立ちをしている少女が一人。

「いつてーな！！！テメエ何すんだよ！！！」

水面から顔を出し、かなりイラッとした表情をしている正成。

「うるさいわねえ！！あんたがちゃんとストレッチしてないのがいけないんですよ！！！」

相変わらず仁王立ちで正成に注意をする女子生徒。

彼女の名前は凜奈。泡岸凜奈。正成と同じ征咲高二年二組。2月7日生まれで、征咲高水泳部マネージャーだ。

肩まであるセミロングの髪は薄い茶色（地毛）で、目は若干大きめ、少し焼けた綺麗な肌、男子達の間ではストライクの領域だ。ちなみに勉強はあまりできず（特に英語）運動は得意、正成と同じタイプだ。

ちなみに、今日の6限終了時に正成に話し掛けてきた女子は、凜奈だ。

「早く上がってストレッチしなさい、バカ！」

水面にいる正成に向かい叫び続ける凜奈。

「うるせえ！！第一、俺をプールに突き落としたのお前だろ！」

正成は怒りを増加させながらプールサイドに向かい泳ぎ出した。

7

正成と凜奈。

二人は幼なじみだ。

二人の家はそんなに離れてなく、徒歩で三分もあれば行ける距離。二人は幼稚園の時からずっと一緒に、小学の時は五年生の時以外は同じクラス、中学の時は二年生の時以外は同じクラスと、ほぼ一緒のクラスなのだ。

ちなみに高校は一年二年ともに同じクラス。

「あゝあ、今日は最悪だったよ」

部活終わりの帰り道、正成は友達の大と拓海とともに帰路に
いた。

「正成は何もかも適当過ぎるんだよ」

「つづつのは拓海、

「……」

無言で携帯をいじくっているのが大。

「だからってさ、跳び膝蹴りはないだろ！」

正成は背中をさす。

まだ、跳び膝蹴りを喰らった跡が残っている。

「それはいいけどさ、正成、もう駅だよ」

拓海の大を受け、正成が右を向くと、そこには征咲駅が。

「おう、拓海、大、じゃあな！」

正成は二人に別れを告げる。

拓海と大は征咲市在住、徒歩通学の生徒。

正成は隣の上谷市に住し、電車で通学しているので、帰り道は
いつもこの征咲駅で別れるのだ。

「・・・喉渴いたな、ジュースでも買うか」

正成は駅の入口にある自販機の前で飲み物を選ぶ。

(今日は暑いからな、コーラとかにしとくか)

正成は自販機のコーラのボタンを押した。

その時、

「うわっ、コーラとか選んでるよ、体に悪う〜」

いつも聞き慣れた声、正成はスツと振り返る。

そこには、予想通り凜奈の姿が。

「別に人が何飲んだっていいだろ」

「でも水泳選手が砂糖たっぷりのコーラって・・・」

そう言う凜奈の手にはサイダーの缶が・・・

「お前だつてサイダー飲んでるじゃん」

「これは天然水のサイダーだからいいの!」

なんだその理屈、と、正成は思ったが、口には出さないでおいた。いつつ、凜奈と口喧嘩すると何故か正成が負けてしまうのだ。

正成は無言でコーラを持つと、駅の中に向かって歩き出した。

「ちよっ、なんでシカトするのよ!」

凜奈が正成に駆け寄って来るが、無視。

「ちよっと待ってよ」

凜奈の言葉を見無視し、改札口を通過する正成。

「正成待って、あたし今日定期忘れちゃったから切符買わないと・
・っってアレ?」

改札の向こうには帰りの電車、それに乗り込む正成の姿。

「1番線発車します。ドアにご注意下さい」

アナウンスが駅内に響く。

「やばいつ!」

凜奈が急いで切符を買っている頃、正成を乗せた電車はゆっくりと発車した。

翌日、朝、征咲高二年二組教室。

「……んあ?」

いつも通り1番に教室に来たと思っていた正成は、教室内に他の誰かがいる事に気が付いた。

「アレ？雄大か？」

そこにいたのは雄大、松場雄大だった。

「何してんだ？こんな朝っぱらから」

「いや、別に。ただ、面白いもの見つけてさ」

「面白いもの？」

「・・・拓海の机の中、見てみな」

「あ？」

正成は拓海の机の中を覗いた。
教科書やノートが一冊も入っていないその机の中に一枚の紙が・・・

「読んでみな」

「・・・勝手に読んじゃマズイだろ」

「大丈夫だから」

「・・・」

正成は好奇心に負けた。

ぐしゃぐしゃになっていた紙を丁寧に慎重に開いていく。

そこには・・・

「・・・っ!」

その紙は、どこかの女子に貰ったであろうラブレターが・・・

「な？面白いもんだろ？あの拓海が告られてんだぞ!」

雄大は大笑い。

「うん・・・やっぱり見なきゃ良かった」

正成はラブレターを元のクシャクシャな感じに戻すと、そっと拓海
の机の中に戻しておいた。

(拓海に彼女か・・・考えもしなかったな)

その日の授業終わりの部活、正成はストレッチしながらそんな事を考えていた。

拓海は、はつきり言って冴えない男子。ルックスもびみよ〜だし、バカだし・・・

(まさか・・・先を越されるとは・・・)

「こらあ！谷笠、いつまでストレッチやってるつもりだ！！」

背後から顧問のお怒りの声。

「・・・・・・・・」

正成は無言でストレッチを止めると、そのままプールへダイブ！

ドボン！

「谷笠、先にシャワー浴びろ！！」

顧問の注意を無視し、正成はクロールしながらプールの端へ。

「・・・・・・・・っ！」

正成は端に着くとその場で深呼吸、呼吸後、一気にクロールで泳ぎ出した。

バシャっ！バシャっ！

もの凄いスピードで25メートルを泳ぐ正成。

バシャっバシャっバシャっ!!!

両足で水を漕ぎ、両腕で水を押し出す。
辺りにわずかな水流を造りだす。

ただ、前に進む。

「・・・ったく、谷笠のやろう・・・おい、泡岸、タイム計つて
るな？」

「はい」

白いTシャツ、下は水色の薄いジャージで、裾は少しめくってあり、オレンジ色のビーチサンダルを履いている水泳部マネージャー
泡岸凜奈の手には、ストップウォッチが。

バシャっ!!!

太陽の光りで水が透き通り、プールは正成の泳ぎで波が立っている。

正成は、ただ、前に向かい泳ぐ。

そして・・・

パッ!!

正成は25メートルを泳ぎきった。

「泡岸、タイムは？」

顧問は凜奈が持っているストップウォッチを覗き込む。

「鈴木先生、新記録出ました・・・」

「なんだって!？」

驚く顧問鈴木。

「・・・正成って、どうでもいい時とかに限って新記録とか出しますよね」

凜奈はプールから上がろうとしている正成を見ながら言った。

「・・・また跳び蹴りでもしてこようかな」

凜奈はストップウォッチを顧問に渡すと、その場でサンダルを脱ぎ、一気に正成目掛け走り出した。

「お、おい泡岸! プールサイドで走るな!!」

鈴木が叫ぶが凜奈はそれを聞かず、正成に向かい渾身の一撃を放った。

「・・・なんでウチの部員は俺の話の聞かないんだあゝ!!」

鎚木は激怒、陰では他の部員が「鎚木が壊れた」などと陰口を叩いていた。

その日の帰り道。

「つたく、今日だけで跳び蹴り5回だぜ、さすがに参った・・・」
背中に湿布を貼っている正成はいつも通り、拓海と雄大と帰路についでいた。

「・・・お疲れ様です、正成君」

「お疲れ様じゃなーよ、拓海もいっぺん喰らってみな。死ぬから」

正成は拓海に向かい蹴りの構えをした。

「俺はやだよ！そう言うのは正成だけで充分」

拓海は正成の蹴りの構えをスルー。

しばらく、三人は無言で歩いた。

「なあ、拓海」

正成はふと、拓海に話し掛けた。

「なに？」

「お前ってさ、彼女とかいるの？」

「は！？」

驚く拓海。

「いや、だから彼女とかいるのかって」

「……いない事はないけど」

下を向きながら答える拓海。

（やっぱりか……）

正成はさらに聞いた。

「誰？」

「秘密の方向で」

「んだよ、べつにいいじゃん」

「秘密」

「……」

正成に多少の挫折感が

(やっぱり先越さた・・・)

その間、雄大はずーっと携帯を打っていた。

その後、駅で二人と別れた正成は、駅舎の中へと入っていく。途中、入口の自販機の前に、見た事のある人物がジュースを買っていた。しかもコーラ。

「うわっ、コーラとか買ってるよ、体に悪う〜」

昨日言われた通りに声を掛ける。

「なっ・・・ま、正成!!!」

コーラを買っていた人物・・・凜奈はすぐさま振り返り、正成を確認する。

「お前、人の事言えねえじゃん」

正成はコーラを顎で指した。

「い、いいじゃん、あたしは水泳選手じゃないんだから」

プシュッとコーラのキャップを開け、ごくごくとコーラを飲む凜奈。

「俺にも一口ちょうだい」

「やだ」

「なっ！ひっでえ！いつも俺はあげてるのに」

「……………ん！」

凜奈は無言でコーラを差し出だ。

「サンキュー」

正成はごくぐくと一口。

「うわっ！バカ！正成飲み過ぎ！」

「へ？俺、そんな飲んだ？」

ペットボトルを見ると、半分ほど入っていたコーラは残り半分の半分……

「全く……だから正成に飲み物はあげたくないの……！」

「悪かったな……！」

「でも……まあ、今日はゆるす」

「なんだそれ？」

二人は自然に笑い出し、仲良く話しながら駅の改札を通った。

空は夕焼けのオレンジ色に輝いていた。

第1話：コーラって結構砂糖入ってるんだよ？（後書き）

登場人物の名前の読み方！の、コーナー！

谷笠 正成

（たにかさ まさなり）

泡岸 凜奈

（あわぎし りんな）

松場 雄大

（まつば ゆうだい）

渡部 拓海

（わたべ たくみ）

鈴木 彰吾

（かぶらぎ しょうご）

次は地名！

征咲市

（せいさきし）

上谷市

（うえたにし）

征咲高等学校

(せいさきこうとつがっこう)

以上です。

では、また次回で！

第2話：腹にナツクルパンチ、あれは痛い！（前書き）

腹にパンチを喰らった事のある人なら、多分今回の正成に共感で
きると思います。

第2話：腹にナックルパンチ、あれは痛い！

「……つまり、ここは先程のX=3が成り立つから……って
おい、谷笠、話聞いているのか？」

「……」

「谷笠あ！！！！」

「……んあ？」

「正成は今、夢の世界から帰還した。」

「んあ？じゃない！今お前寝てただろ！」

「……」

「まだ半分寝ぼけている正成。」

「谷笠あ！！！！！！」

「……多分寝てたと思います」

「今は学校、昼休みを挟んだら時限目、数学の時間だ。」

「やる気あるのか？」

「数学の教師は長谷部。確かよくキレる事で有名。」

「やる気は・・・そこそこです」

正成の机には数学の教科書・・・ではなく、昼休みに食べた弁当箱やペットボトル、マンガ本などが置いてあった。

「谷笠あ！！！！！！」

長谷部は大激怒、50分の授業時間の約半分を正成の説教にあてた。

その間、隣の席の凜奈はずーっと笑いを堪えていた。

「どうしてさ、正成はそんなにバカなの？」

プールサイドに一つだけ置いてあるベンチ。
凜奈はベンチの右端に腰掛けながら聞いた。

「知らねえ。俺の両親にでも聞いてくれ」

正成はベンチには座らず、凜奈の右隣、プールサイドにそのまま腰を下ろした。

今は部活の休憩時間。

正成は海パンに青いTシャツ。

凜奈はいつも通り白いTシャツに今日は黄色の薄い下ジャージ、

そしてビーチサンダル。

「・・・正成ってさ、真面目に頑張ろう、とか考えた事ない？」

「あ？なんで？」

「いや、その・・・やっぱりなんでもない」

「は？」

「今言った事は忘れて！！」

「は？意味分かんない？」

「だから何でもないって！！」

「だから意味分かんって言うてるだろ！！」

イマイチ話が噛み合っていない二人。

「はつきりしない奴にはお仕置きだ！」

正成はその場から立ち上がり、ベンチに座っている凜奈の前へ。

「え？な、何するの？」

凜奈の心配をシカトし、正成は両手で凜奈の両足首を持った。

「は！まさか！」

何かに気が付いた凜奈。しかし、時すでにおそし。

「ふんっ！」

正成は凜奈の足首を思いっきり引っ張った。

「ちよっ！！！」

勢いよく引っ張られた凜奈は、お尻から思いっきり地面に落ちた。

どんっ！！

「痛いっ！」

「はつきりしないとお仕置きだ！」

正成は笑顔、凜奈は痛みで若干涙目。

「・・・よくも！」

凜奈はすぐさま立ち上がり、笑っている正成の腹目掛けてナックルパンチ！

「ぐはっ・・・」

正成、一撃でノックダウン！！

脆くも地面に倒れさった。

「ふん、当然の報いよ」

凜奈は仁王立ちで正成の前に立った。

まさに勝者！！！！

「いいかお前ら、明後日は岡田工業高との練習試合だ。気い抜くなよ」

水泳部顧問の鍋木は明後日のスケジュールが書かれたプリントを部員全員に配布した。

「明後日10時にプール入口に集合、ちなみに明日は学校のプールが使用出来ないの、各自市民プールなどで練習してくるように！！」

鍋木は張り切っているが、正成はナツクルの痛みでそれどころじゃない。

部活が終わり、いつも通りのミーティング。皆、すでに制服に着替えている。

「いいな、明後日遅刻するなよ！」

いつも通りの帰り道。

今日は部活が長引いたため、拓海と雄大は先に帰ってしまい、正成は一人で下校。

空はもう薄暗く、人もまばら。

「……一人だとつまらん」

正成はポケットから携帯を取り出し、時刻を確認……

電車発車まであと5分

「やっべー!!」

正成は急いで携帯をポケットにしまい、一気に走りだした。

その時!

どんっ!

「ぐはっ!!」

正成は何かとぶつかった。

「す、すみません」

正成は何とぶつかったのかを確認する。

今、正成の前にいるのは人間。しかもかなりヤンキーっぽい人。

(うわー！この人モヒカンだよ、すげえ)

正成とぶつかったのは、学ランにモヒカン頭、目つきは悪く、手にはポロポロのかばん。ヤンキームードの男子。

「おいてめえ！何様じゃこらあ！！」

お怒りのご様子のヤンキー男子。

「す、すみません」

正成はとりあえずと言った感じで謝る。

「なんだてめえ！シバいたるか！？」

いきなり正成の胸倉を掴むヤンキー男子。
相変わらず目つきがこわい。

「ちよつ、暴力とかは無しにしません？人間には会話という超平和的和解方法があるんですし」

正成は愛想笑い。

「てめえ屁理屈こいてんじゃねえよ！こっちはな、パチンコで負けてイラついてんだよ！」

(パチンコって、コイツ未成年だろ！？)

正成はまじまじとヤンキー男子の顔を見る。

「・・・っ！てめえ何人の顔じろじろ見てんだよ！やっぱ殺す！」
ヤンキー男子は左手で正成の胸倉を掴み、右手で正成の顔を殴つた。

バンっ！

正成は勢い余って地面に倒れた。

「死ね！」

倒れている正成に向かい蹴りを放つヤンキー。
しかし・・・

「・・・ったく、人が下手に乗ってたら、調子こぎやがって」

正成はヤンキーの蹴りを片手で受け止めると、一気に起き上がり、ヤンキーが驚いている間にヤンキーの腹目掛けナックルパンチ！！！！

どんっ！！！！

「ぐはっ！」

ヤンキーはパンチをもらに喰らい、地面に倒れた。

「けっ！！！！」

もう電車には間に合わない。

「ったく・・・ん？」

腹を抱え倒れているヤンキーの近くに、一冊の生徒手帳が。

「……………」

正成は無言でそれを拾い、中を確認。

岡田工業高等学校二年A組、山田誠

(岡工って、確か明後日の練習校じゃん)

正成は生徒手帳をヤンキー男子……誠の近くに投げた。

「じゃあな、誠っちゃん」

正成はそのまま駅に向かい歩きだす。

「くそっ!」

後ろから誠の声が聞こえたが、無視。

岡田工業高等学校

偏差値40の学校で、最近は不良の巣窟と化している学校。

ヤンキーもいればスケバンもいる、まさに昭和かつてツッコミを入れたくなる学校だ。

制服は男子は学ラン、女子はセーラー。

一方、正成達が通っているのは

征咲高等学校

偏差値45で、そこそこのバカが多い学校。

征咲市唯一の高等学校でもある。

制服は男女共にブレザーだ。

しかも、男子のブレザーは少し緑っぽく、女子のブレザーは少しピンクっぽい。ズボン、スカートはチェック柄。

中学女子からはカワイイと評判で、毎年入学率は女子の方が多い。

日曜日、今日は征咲VS岡工の練習試合だ。

ルールは簡単、各校代表4人を選抜、4人VS4人のリレー対決だ。

「あ〜だりい〜」

正成は集合時間から10分遅れて校門をくぐった。

「ちよつと、正成！」

「んあ!？」

プールの方からダッシュで駆け寄ってくる女子が一人。

「ちよつと正成、あんた何したの!？」

女子　凜奈は、見たところすごく焦っている。

「んだよ、10分くらいいいじゃん」

「は?違う!正成あんた金曜日何した!？」

「金曜日?」

「あーもう、いいから来て!」

「うわっ、ちよっ!」

凜奈は正成の腕を掴むと、一気にプール目掛け走りだした。

「あれ！」

プールについた凜奈が、プールサイドにいる人を指差した。

「どれ？」

正成は目を細める。

見たところ、一人のモヒカン少年がプールサイドで暴れていた。微かだが、

「谷笠を出せえ！」

と、聞こえる。

「あ、たしかアレは誠つちゃんだ」

興味なさ気に答える正成。

「誠つちゃん？と、とにかくアレを何とかしてよ、みんな怖がって部室から出て来ないの！」

プールサイドには、岡工水泳部と顧問鎬木の姿、そして誠。

征咲高水泳部員は一人もいない。

「……つたく、しょーがない、誠っちゃんに挨拶でもしてくるか」

正成は一人プールサイドに向かう。

「待つて、あたしも行く」

凜奈は正成の後ろにピッタリとつく。

「女はついてくるな、多分怪我するぞ」

「大丈夫、いざとなったら正成が守ってくれるから」

「俺は助けねえよ」

二人はプールサイドへ

「よっ！誠っちゃん！元気か？」

正成の登場にさつきまで誠に便乗して騒いでいた岡工水泳部は一斉に静まり返った。

「でたな、あんた谷笠つて名前なんだな」

ピンクの海パンと言う、何とも奇抜な感じの誠。

「なんだ、誠っちゃんも水泳部だったんだ」

相変わらず誠をおちよくる正成。

「んだとテメエ！誰が誠っちゃんだオラ！」

「君だよ」

「あゝ！！！！！！」

怒り狂う誠。

「ちよっと正成、何あいつを刺激してんのよ」

後ろから小さい声で注意をする凜奈。

「いいんだよ」

正成は凜奈を置いて誠の目の前へ。

「誠っちゃん、どうせ蹴り付けたいならさ、水泳で勝負しない？」

「あんだとコラ！」

誠は既にブチ切れ状態、これなら考えが働かず、説得しやすい（多分）

「いいじゃん、どうせ喧嘩なんかやるより、水泳の方が勝ち負けがはっきりしてるし」

「何勝手に話進めとるんじゃ！」

「いいじゃないか、もし誠っちゃんが勝ったら俺を殺していいよ」
辺りがさらに静まり返った。

「なんだつたら、凜奈もあげるし」

「なっ・・・!!」

凜奈絶句。

「ああ、いいだろう。俺が勝ったらお前を殺してこの女を貰う」

「えっ!!」

凜奈絶句。

かくして、正成と凜奈の生死を掛けた水泳リレーがはじまろうと
していた。

第2話：腹にナックルパンチ、あれは痛い！（後書き）

改めて思う。

モヒカンって、凄いやなあ〜！！

次回、正成VS誠の水泳ガチリレー対決！！

第3話・物事の司会役って案外、頭を使う仕事だ（前書き）

水泳リレーガチバトル、開幕です。

第3話：物事の司会役って案外、頭を使う仕事だ

「第一回、チキチキ征咲VS岡工、正成と凜ちゃんの生死を掛けた大水泳リレーバトル!!」

司会役の征咲高水泳部員、橋本洋一が甲高い声で叫んだ。

『うおおおおお!!』

プールサイド
会場は凄く盛り上がっている。

「さて、本日の司会を勤めさせて頂く橋本洋一です。よろしくお願ひします!!」

『うおおおおお!!』

征咲、岡工関係無しに盛り上がる会場。

「では、まずルール説明をします!!」

洋一はそう言うと、手元の紙を見た。

「今回のリレーバトルは4対4で行われ、先にアンカーがゴールした方が勝ちです。そして、第1選手は平泳ぎ、第2選手はバタフライ、第3選手は背泳ぎ、第4選手はクロールで、1人25メートル泳いだら次の選手にバトンタッチ」

洋一はここで一回深呼吸をした。

「ちなみに、審判は平等に各校から2人ずつ、計4人でジャッジします。」

そして、岡工が勝負に勝った場合、正成の命と凜ちゃんの今後が岡工に渡されます。」

しかし、征咲が勝負に勝った場合、山田君は正成のパシリに！
さあ、いよいよ選手の入場です！！」

洋一の言葉を合図に、プール更衣室から8人の男子生徒がぞろぞろと出てきた。

「選手紹介！まずは岡工だ！

平泳ぎは斎藤博一

バタフライは笹本正

背泳ぎは福沢真治

クロールは山田誠

続いて征咲！

平泳ぎは若松翔太

バタフライは中崎諒

背泳ぎは山城敦史

クロールは谷笠正成

以上8人だ！」

「うおおおおお！」

「かんばれ岡工！」

「山城部長頑張れ！」

「誠行けえ〜！」

「正成、凜ちゃんを守れよ！」

プールサイドからの激しい応援、結構近所迷惑だ。

「では、各選手は自分の位置にスタンバイしてください！」

洋一の甲高い声が辺りに響く。

「まったく、洋一のヤロー調子乗ってるよ」

正成はプールサイドの反対側にいる洋一に向かいガンを飛ばす。

「おい、正成、大丈夫か？」

「あ、山城部長」

今、正成に話掛けて来たのは水泳部部長の山城敦史、三年生だ。

「正成、お前アンカーなんだから、しっかり頑張れよ」

敦史は軽く正成の肩を叩いた。

「……負ける気はしませんね」

今度は誠に向かいガンを飛ばす正成。

誠はこちらの視線に気がついていないらしく、辺りをキョロキョロしている。

「始まるぞ、正成はこっち側じゃなくて反対側だろ？」

「あ、そうだった」

正成はプールサイドを歩き、所定の位置へ。

その時、正成はふと、どこからか視線を感じた。

正成はプールサイドの端っこ、観客席の方を見た。何となくだが、そこから視線を感じたからだ。

そこには、怒りの表情をした凜奈の姿か。

(うわっ！何ちゆう顔してんだアイツ！)

正成は一瞬戸惑ったが、結局凜奈をスルー、正成は所定の位置へ。

そして……

「では、いよいよスタートです！」

洋一がピストルを空に向けて構える。

両校第1選手は、既に飛び込みの構え。

風がすーっと吹いた。

プールの水は静かに小さな波を打つ。

辺りが静寂の中、両校の応援だけがこの場に響いていた。

「位置について」

正成は軽しく深呼吸。

「よーい」

洋一は耳を片手でグッと閉める。

第1選手の2人はぐつと息と唾を飲む。
そして……

「ドンっ!!」

パァァァン!!

洋一のドンっ！と、空砲の音が重なった。

そして、それと同時に第1選手の2人はプールへダイブ！

バツシャーン！！

『うおおおおお！』

会場のボルテージは一気に上昇！

(・・・始まったか)

正成は軽くストレッチを開始。
ぐいっとな伸びをする。

「谷笠、テメエぜってえ殺すからな」

隣でスタンバイしている誠がガンを飛ばしてくる、が、正成は無視。

「調子乗ってんなや」

誠はさらにガンを飛ばすが、正成は無視。

「テメエっ！！」

その時、会場が一層うるさくなる。

『行けえー！！！！』

いつの間にか既に選手は2人目、競技はバタフライになっていた。

「早っ!!」

正成は急いでストレッチを続行する。

現在、征咲が約5メートルほどリードしている。

そして第3選手、征咲は敦史にバトンタッチ。

「ははは、このままじゃ君は俺の奴隷だな」

正成は軽くにやけながら隣の誠を見る。

「・・・やべえ」

まさかの展開に誠はア然。

現在両校とも第3選手、背泳ぎ。

しかし、征咲が約10メートルほどリード。

「正成!!」

「了解!!」

敦史が25メートル泳ぎ切り、正成にバトンタッチ!!

「じゃあな、誠っちゃん!!」

正成はにやけながらプールにダイブ、クロールで泳ぎ出した。

「あの野郎!!」

そして、約10秒ほど遅れて岡工もバトンタッチ。

「くそっ」

誠が急いでプールにダイブするも、正成は既にゴール寸前。

「お先〜!!」

正成は何事もなく普通にゴール。

接戦もクソもあつたもんじゃない。

征咲の圧勝だ。

「あああ〜!!」

誠の悲しい悲鳴が聞こえた。

「呆気ないいな」

正成はまだ泳いでいる誠に向かい言った。

『つおおおおお!!』

会場は多いに盛り上がった。

結局、あのあと岡工のメンバーは逃げるように去って行った。
誠の奴隷計画もあやふやのまま。

正成は勝つたのにも関わらず凜奈からナツクルパンチを貰った。
腹に。

そして、鎚木からはこっぴど怒られた。本人もノリノリだったく
せに。

ぶつちやけ、呆気なく終わってしまったな……が征咲水泳部員
の感想だった。

そして翌日、月曜日。

正成は何事もなく、いつも通りに朝1登校、しばらくしてから皆
が次々に登校してきて、8時50分に朝のSHLが始まった。

そこで、ちょっとした事件が起こった。

いつも通り、担任の高橋が点呼（出席簿）を取っていた。

「よし、今日も全員……ってあれ？泡岸がいないな。誰か知っ
てるか？」

その言葉に、今まで机に俯せて寝ていた正成は目を覚まし、ちら

つと隣の席を確認。

誰も座っていない席が隣にあった。

「無遅刻無欠席の泡岸にしては珍しいな」

高橋はあっさりとスルーする。

(・・・凜奈の奴、寝坊か?)

正成も少しは疑問を持ったが、すぐに忘れた。

そして昼休み。

正成は雄大と拓海と雑談中。

「あゝあ、暇だ〜」

拓海が暇そうにあくびをした。

「んだよ、暇なら彼女とこ行ってイチャイチャしてこいよ」

正成は半分死んだ目をしながら言った。

「校内でイチャイチャ出来るかバカ」

拓海はまたあくび。

「いい加減教えるよ、お前の彼女」

正成の目はまだ半分死んでいる。

その時、

「メールガキマシタ、メールガキマシタ、シキユウカクニンヲシテクダサイ」（正成のメール着信音）

「んあ、メールだ」

正成はポケットから携帯を取り出し、メールを確認する。

「正成、まだメールの着信音それだったの？いい加減変えたら？そのダミ声着信音」

拓海が突っ込む。

しかし、いつもは反論してくる正成が反論して来ない。

「正成？どしたの？」

珍しく雄大が話し掛ける。

しかし、正成はそれも聞かず、メールを凝視。

そして、

「なんかヤバイ事になったみたい」

正成は2人にメールを見せた。

拓海と雄大は携帯の画面を確認。
そこには……

「谷笠、今日の昼休み、学校を抜けて上谷倉庫まで来い。誰にも知らせずに1人だ。いいな？もし来なかつり、他人に知らせでもしたら……」

そして、このメールの下には1枚の写メが。

そこには、倉庫の中、床に倒れている凜奈の姿が、そして、辺りには覆面軍団の姿が確認できる。

「ま、正成！これって……」

拓海は大慌て！

「メールの差出人は泡岸さんからの携帯からだ。おそらく誘拐だな」

雄大はメールの文章を隅々まで確認する。

「……多分、岡工の連中だろうな」

正成は画像を確認。

「ほら、この覆面軍団が着ている服は岡工の学ラン制服だし」

「ま、正成、どつするの？」

拓海は大人大慌て！

「警察に通報する？」

雄大は自分の携帯を取り出す。

「まあ、一旦落ち着こうぜ。とりあえず1回凜奈の携帯に確認のメールを送ろう。一応な」

正成は携帯のメールを打ち始める。そして送信。

しばらくして着信音が鳴った。

「……………」

正成は無言でメールを読み、2人に見せる。

そこには…………

「谷笠、早く来い」

の、1文だけ。

「俺、ちよっくら行ってくるわ」

正成は椅子から立ち上がる。

「あ、危ないよ！」

拓海は大大大慌て！

「大丈夫。何かあったら電話するから」

正成は自分の鞆を持ち、ゆっくり教室を出る。

「雄大、次の授業なんだっけ？」

「長谷部の数学」

「じゃ、適当に言い訳しといて」

「気をつけるよ」

雄大は携帯をしまう。

「ちよっと、雄大何言ってるの！ここは止めるべきじゃ……ってアレ？」

「拓海、正成ならもう行ったよ、ダッシュで」

雄大は数学の教科書を机の上に出した。

「もし、今日中に正成から連絡が無かったら、警察に届けよう」

「でも……」

拓海はやはり不安そうな表情。

正成は駅へ急いだ。

第3話：物事の司会役って案外、頭を使う仕事だ（後書き）

非日常的な正成の日常、次回、本当に非日常的な事が正成に起こります。

第4話：男は何かを護るために生まれてくるのだ（前書き）

今回、最終回です。

正成と凜奈の行方は？

そして、最終回にも関わらず今回は短めです。
なので、今回はいつもよりゆっくり読んでみて下さい！

第4話：男は何かを護るために生まれてくるのだ

「誠っちゃん、いるかあ？」

正成は呼び出しを喰らっている上谷倉庫に来ていた。

「誠っちゃん？」

正成は辺りを見渡す。

一面赤と青の倉庫やコンテナばかり、人の気配がない。

「誠っちゃん、いるなら出てこいよ」

正成がそう言ったその時！！

(・・・っ！！)

ピタっ！！

「よお、出てきてやったぜ谷笠」

正成は振り返えらずに状況を確認する。

正成の背後には恐らく誠がいる。

そして、正成の首筋にあるこの冷たい感触の物は多分ナイフ・・・

「よ、よお誠っちゃん、元気だった？」

誠からは正成の顔は見えない。しかし、正成は一応愛想笑い。

「・・・お前の首、斬ってもいいんだぜ」

多分ナイフであろう物を正成の首筋にぐいっと当ててくる。

「ちょ、ちょっと待とうぜ、俺、暴力反対な平和主義者だから」

正成はそう言いながら辺りをチラッと伺う。

(凜奈はいないみたいだな・・・)

「おい谷笠、お前死にたいのか？」

誠は多分今、にやけているだろう。呂律がまわっていない。

「いや・・・まだ生きています・・・ってか、凜奈はどこ？」

「谷笠、お前・・・」

誠が何か言い掛けた。今誠は油断している。

「バーカ」

正成はその場で一気にしゃがむ。

「なっ！..!」

誠が驚いている隙に正成は左足を軸にした足払いを放つ。

「なっ」の..!」

誠の両足にクリーンヒット！

誠はバランスを崩し、その場で倒れる。

その隙に正成は振り返り誠からナイフを回収、倒れている誠の首筋に刃を当てる。

一瞬の出来事、形勢逆転だ。

「誠っちゃん、凜奈はどこだ？」

正成は笑顔で聞く。

誠にとってはかなりの恐怖だ。

「だ、第三倉庫」

誠の声は震えていた。

「サンキュー！」

正成は倒れている誠の首筋に向かい手刀を放つ。

「ぐへっ……」

情けない声と共に誠は気を失った。

第三倉庫

ガラガラガラ!

正成は鍵が掛かっていなかった第三倉庫の扉を開けた。

「……………」

正成は倉庫の中を見てビックリ!

「あ、正成遅い!」

倉庫の中にいたのはぴんぴんの凜奈と床に倒れている大量の覆面軍団。

「り、凜奈……」

ア然の正成。

「あんたがあまりにも遅いからあたしが倒しちゃった」

(そう言えば凜奈の家って空手道場だったっけ)

正成は半ば強引に納得する。

(もう凜奈に喧嘩売るのはよそう)

「どしたの?」

凜奈は俯いている正成の顔を覗き込んだ。

「へ？あ、いや、何でもない」

正成は凜奈から顔を逸らす。

「…………正直ね、正成が助けにきてくれた時、とても嬉しかった」

「なんだよ、急に」

凜奈の顔は少し赤い。

まさか…………と、正成は思った。

「あのね、その…………えっと…………」

「……………」

まさか…………が、もしかして…………に変わった正成。

「…………今まで、ずっと恥ずかしくて正成に暴力とか振るってたけど、本当はあたし、正成の事…………」

正成は真っ赤に染まった凜奈の顔を見て、もしかして…………が、マジで！に変わった。

「ずっと、す……………」

その時！

「あ、正成発見」

2人は突然の声にビックリし、物凄い勢いで声のした方庫の入口を見る。

倉

そこには、拓海と雄大の姿が。

「正成も泡岸も無事かあゝ！？」

正成はア然、凜奈は下を向く。

「……お前ら、学校はどうした」

これが、拓海と雄大に向けて喋った正成の第一声。

「学校？もう終わったよ？」

拓海はあっさり答える。

「それより、2人共大丈夫か？」

拓海と雄大に悪気はなさそうだ。

「あ、ああ。大丈夫」

正成はそう答えながら凜奈の方を向く。
真っ赤な顔は下に向きっぱなし。

「……空気読めや、バカ」

正成は拓海と雄大に向かい小声で呟いた。

その後、正成達は誠達を警察には突き出さずに、そのまま置いて帰った。

正成いわく、

「情けだ」

らしい。

そして事件のあと、帰り道で正成は凜奈に一言、

「俺も、お前の事、悪くは思っていないぜ」

告白なのか、嫌みなのかよくわからない言葉を残し、凜奈と別れた。

そして、事件の翌日、朝正成の自宅。

「あゝ……学校行きたくねえ……」

凜奈の顔を見にくい、と言っのが本音。

「昨日、あんな事言わなきゃ良かった……」

制服に着替えた正成は玄関に行き、靴を履く。

窓から入る朝日が正成を白く照らす。

「でも、まあ、いいか」

正成は靴を履き終えると、ドアを開け、学校に向かい歩き出した。

この後、正成は凜奈と付き合う事になるのは、また別の話。

第4話：男は何かを護るために生まれてくるのだ（後書き）

ご愛読感謝！！！

今までありがとうございます！！

良かったら、作者の別の作品や、今後、今話に代わる新連載を書く予定なので、そちらの方も読んで頂けると嬉しいです。

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174i/>

俺の日常って何だ！？

2010年10月13日19時35分発行